

冬季スプレーギクにおける植物成長調整剤の使用時期が生育に及ぼす影響

和歌山県農業試験場 研究員 井溪 奏一朗

目的

スプレーギクの冬季作では、切り花のボリューム不足による上位階級品の比率低下が問題となっている。生産現場では、花首や節間の伸長抑制による品質向上のために、植物成長調整剤(ビーナイン顆粒水溶剤)が用いられるが、登録されている使用基準の幅が広く、明確な使用方法が定まっていない。そこで、冬季スプレーギクの品質向上を目的として、植物成長調整剤の使用時期が切り花品質に及ぼす影響について検討した。

方法

- 伸長性の異なる秋ギク型スプレーギク品種‘ガルダ’、‘セイヒラリー’、‘セイプリンス’を供試。
- ビーナイン顆粒水溶剤を1000倍に希釈し、以下の時期に100L/10a散布。
 - ①定植30日後区
 - ②消灯時区
 - ③消灯10日後区
 - ④消灯30日後区
 また、対照として⑤無処理区を設定した。

結果

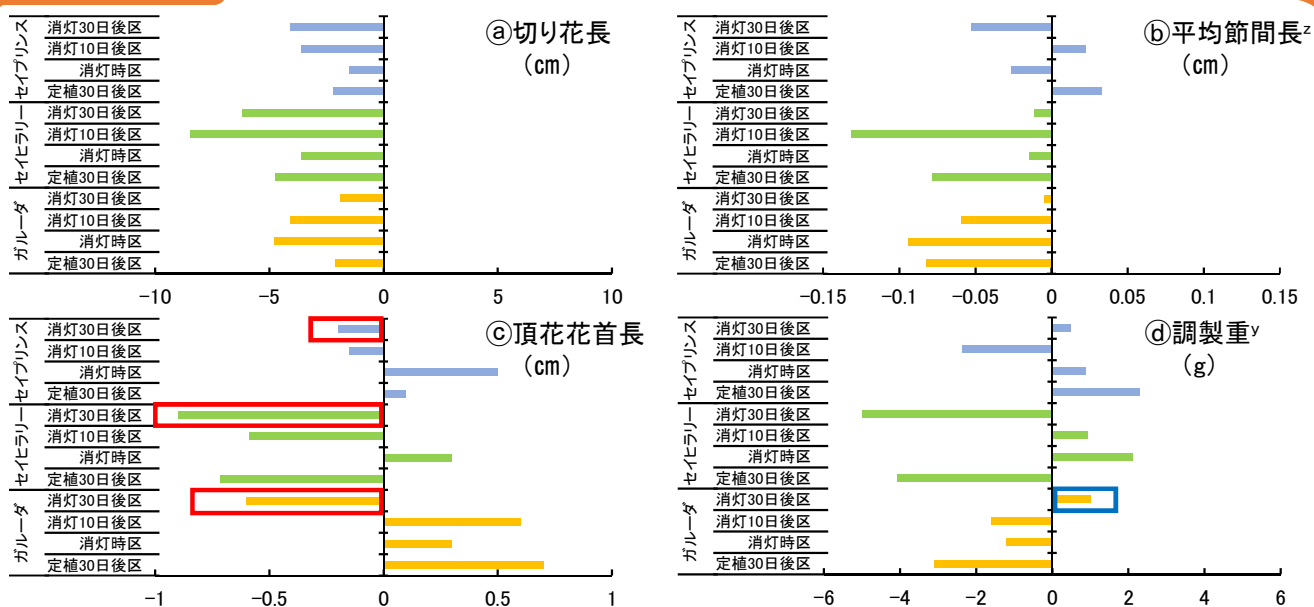


図1 ビーナイン顆粒水溶剤の使用時期が切り花品質に及ぼす影響(各品種における無処理区との差)

z: 切り花長を節数で割った値

y: 切り花を80cmに調製し、基部から20cmまでの葉を取り除いた重さ

スプレーギクの冬季作においてビーナイン顆粒水溶剤を使用することで、切り花長や節間伸長の抑制がみられたが、効果の高い時期は品種によって異なっていた(図1)。

花首の伸長については、いずれの品種においても消灯30日後の処理で最も抑制される傾向が認められた(図1c、2)。

特に‘ガルダ’は、花首の伸長が大きい品種であるため、消灯30日後区において花首伸長抑制による調製重の増加がみられた(図1d)。

今後は、より品質向上効果の高い使用方法を確立するために、ビーナイン顆粒水溶剤の使用回数について検討する予定である。



図2 ビーナイン顆粒水溶剤の使用時期が花首長に及ぼす影響

品種: ‘ガルダ’

左から無処理区、定植30日後区、消灯時区、消灯10日後区、消灯30日後区